

教育

「学力」の未来

沖縄から全国テストをよむ

●●5

山本 隆司

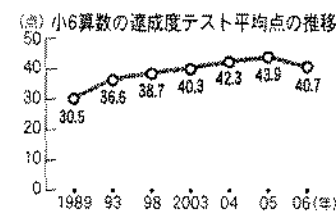
一九八〇年代に沖縄県の主要な教育施策に「学力向上」が掲げられ、全国的な運動として「学力向上対策」が始まった。今こそ「学力向上」とか「学対」は全国的な言葉になつているが、当時は沖縄でしか通用しないものだった。そういう意味では、沖縄は「学力向上」先進県と言える。そして県教育庁は、二十年來の「学力向上」の成果として、「達成度テスト」の平均点と大学入

達成度テスト

点数目的化で意欲低下

作成の達成度テストが小中学校で始まった。達成度テストの結果公表は、各教育事務所単位までとされているが、学校・市町村単位の平均点や順位は公然と知れ渡るようになり、いつのころからか「学力向上」の目的は、

作成の達成度テストが小中学校で始まった。達成度テストの結果公表は、各教育事務所単位までとされているが、学校・市町村単位の平均点や順位は公然と知れ渡るようになり、いつのころからか「学力向上」の目的は、



を特訓するのが普通になっている。毎年同じような問題はかきかき繰り返し出題されるので、上手に対策すれば平均点の上昇はさほど難しくない。小六においては、当初五十点満点で三十点前半の平均点が、

達成度テストの平均点と順位の上昇になってしまった。達成度テストの成績は、学校や教師評価につながるという意識からか、対象の小六と中二・三・四・五・六では、授業中や放課後、夏休みに対策問題

四十点半はまで上がってしまつた。テストは本来、学習した成果を客観的に分析して、今後の学習や指導に役立てることが目的である。数字を上げることが目的化してしまうと、テスト本来の意味がなくなってしまう。つまり、テ

ストに出ることだけを学習し、出ないことは学習しなくなる。年齢の早い時期からテスト対策をすれば、競争でしか学習意欲がわかなくなる。当然のことだ。

沖縄の小中学生は達成度テストで非常に高い点数を取っているが、中学生になると点数も意欲も急激に落ちていく。さらに高校生は高校入試時に学力が頂点になり、その後は中学生の時より学力が落ちていく場合が多い。早い時期からのテスト対策が学力低下を招いている。

求められる「学び」の本質

大学センター試験で沖縄は、数年前に四十七位を脱出し、現在四十四位後になってきている。しかし、現役生のセンター試験志願率は約21%。全国平均40%の約半分だ。つまり、一部の進学校とそうでない高校の学力の二極化が急激に進行したということである。受験やテストでの競争を基本に、「学力向上」を進めた結果、沖縄の高校生の約80%は、その競争のスタートにも立っていないという深刻な状況に陥っているのである。今、求められているのは、競争の原理を超えた「本来の学び」を追求することである。

(小学校教諭)